



Title	中世低地ドイツ語『パリスとヴィエンナ』試訳（下）
Author(s)	尾崎, 久男
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54551
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世低地ドイツ語『パリスとヴィエンナ』試訳（下）

尾崎久男

[27.]

麗しのヴィエンナが父親ドルフィン家に帰って来て、助任司祭が彼女をかばった様子。

さて、ヴィエンナが前へやって来ると、彼女の父親は怒っていた。ヴィエンナは地面にひざまづいて、泣きながら話した：「徳が高く優しいお父様。私がお父様に大きな非行をはたらいたのは存じております。私にはそれが残念です。ですが、私は無分別な愛に導かれて、あの方を愛さずにはいられないのです。あの方はお抱きの愛のためにフランス中で最も優れた婦人の愛にも十分に値いたします。と申しますのも、あの方の右に出る者はこの世にいないと存じているからです。こんな愛で愛されたのは私が初めてではないでしょうか。優しいお父様。私はお慈悲にすぎります。私には懲らしめになって他の者には見せしめになるように、お気に召すままに私を罰して下さい。ですが、知っていただきたいのです。神と私の魂にかけてここから離れた最後の日と同じく、私はけがれを知らない乙女です。こちらの助任司祭様がお父様に真実をおっしゃって下さいます。」助任司祭は彼女がどんなふうにも三人の者と一緒に来たかを話し始めた。「この方々の中に美しく若い騎士がおりました。その者が川の深さを調べようとして、他の者が向こう側に案内しようとしておぼれ死んだと存じます。二人の乙女は拙宅にいらっしゃって、一つのベッドで一緒にお休みになりました。騎士は私の近くで眠り、他の二人の男は馬小屋の馬の近くで眠りました。」すでに腹を立てて苦々しげだったが、この話を聞くと、ドルフィンはいっそう納得した。助任司祭に家へ帰るための一切切切を与えた。ドルフィンがヴィエンナの手を取り、母親の部屋へ連れて行った。彼女はとても苦しみ、病気で寝込んでいた。父親も母親も彼女と一緒にイザベルもしかった。イザベルはヴィエンナが城から離れた時と同じく、なおけがれを知らぬ乙女だと言った。ドルフィンと言った：「なんという恥を私たちにかかせ、なん

という悪評を全世界に広めたことか。約束しよう。このことを知る者はみな罪の償いをさせてやるからな。何よりもまず原因である悪質な裏切り者パリスだ。あの者を捕まえよう。もし捕まえたら、犬の前に投げ、引き裂かせてやる。お前たち二人にも罰を与え、目をつぶることはしない。」ヴィエンナが話した：「お父様がきびしく罰しようとなさっているのは存じております。私の命ももう長く続かない定めにあります。確かにお願いいたします。お父様が災いを及ぼそうとなさっている方ほど私が愛した方はこの世におりません。と申しますのも、私は思いも気持ちもあの方に向けていて、私にはあきらめられないからです。お加えになる苦しみが増ければ重いほど、いっそうお父様は私を死にお導きになり、苦しみを短くして下さい。と申しますのも、私はあの方のために死ぬ用意ができていますからです。」ドルフィンが不機嫌そうに部屋から出て行き、家来にパリスの父親を捕まえ、城に留め置き、財産をすべて取り上げるように命じた。ヴィエンナとイザベルを部屋に閉じ込め、食べ物や飲み物をあまり与えないように言った。するとそうだった。彼女らは長い間そこにいた。ヴィエンナが夢に見るのはパリスのことだけだった。彼女はパリスの仲間エドゥワルトと会って話した。もしパリスから知らせがあったら、知らせてくれるように頼んだ。こんなふうにはヴィエンナは悲しみのうちに暮らしていた。

[28.]

さて、ヴィエンナがしばらくの間閉じ込められると、ドルフィンが彼女が非に苦しんでいると思い、彼女を自由にして、結婚させようとした。彼女を元の状態に戻すと、宮廷にいる者みな、特にパリスの仲間エドゥワルトは喜んだ。じきにドルフィンが娘を結婚させたいとフランドル伯爵に手紙で知らせ、だれと結婚させるべきか考えてくれるように頼んだ。それでもって彼に負担をかけ

そうだった。さて、牢獄から出ても、ヴィエンナの心は納得できかった。恋人パリスの生死が分からないので、いつも考え込んで悲しそうにしていた。それに気づくと、ドルフィンがヴィエンナに言った：「ヴィエンナよ。どうしていつまでも悲しんでいるのか。気持ちを納得させなさい。というのも、お前が私にしたことはもう忘れるからだ。お前が望むものをやろう。」恋人パリスがまだ忘れられないヴィエンナが答えた：「尊いお父様。もし私がお父様にいたしましたことをお忘れ下さると確信いたしましたら、私もますます納得いたします。ですが、原因もご存じないパリス様のお父上ヤコブ様をまだ牢獄に入れたままになさっていますから、お父様はまだご記憶ではないのでしょうか。もしお父様が私への愛のためにヤコブ様を自由になさって財産をお返しになったら、私には嬉しいのですが。」ドルフィンは彼女への愛のためにそうしようと言った。ヤコブを牢獄から釈放して、財産をすべて返した。ヤコブはそれを喜んだ。というのも、これ以上捕らえられていたら、彼は死んでしまっただろうからだ。というのも、彼に会って話したのが、できる限り彼を慰めたエドゥワルト以外はだれもいなかったからだ。ヴィエンナはヤコブが釈放されて喜んだ。なお彼女の気持ちはすべて恋人パリスについてエドゥワルトと一緒に話すことだった。彼女はできる限りしっかりと自分を勇気づけた。

[29.]

ドルフィンが送った手紙にぎっと目を通して十五才のヴィエンナを結婚させたがっているのを知ると、フランドル伯爵はフランスで有名なブルグント公爵の息子かイギリス王の息子のどちらかと結婚させるように勧めた。どちらと結婚させたいか再び伝えてくれるようにドルフィンに頼んだ。しかし、彼はブルグント公爵の息子のの方が良いと思った。というのも、王に大きな好意を示していたからだ。この問題をしばしば話し合っただけでドルフィンもブルグント公爵の息子と結婚させるのがいちばん良いと思った。伯爵は公爵にそう伝え、公爵の息子も同意した。

[30.]

パリスがエドゥワルトに現状を書いた様子。

さあ、この話はそのままにしておき、パリスについて書きましょう。私たちが婚約を題材にしている間、彼はジェノバの町でほねのおれる暮らしをしていました。ヴィエンナに抱く愛のためにも敬虔に神に奉仕した。そのため、町の人々はみな彼を愛していた。彼を気高い者と思い、まさに領主の息子に違いないと言った。パリスはヴィエンナの現状や暮らしがどんなふうか知りたがった。彼は二通の手紙を送った。一通は父親に、もう一通は仲間エドゥワルトにだった。彼が父親に書いた手紙はこういう内容だった：「尊い父上。私が不幸のために苦しみや悲しみのうちにあるのを知っていただきたいのです。私はジェノバのある城で一人暮らしをして、人生の喜びと慰めをすべて奪われております。ですが、愚考いたすのは神とその敬愛する母マリアに奉仕することだけです。父上が私をご覧になることは二度となかろうと存じます。と申しますのも、愚計が全生涯世界中の巡礼に出ることだからです。再びお目にかかる前に父上がお亡くなりになり、父上のご機嫌をそこねたまま私を死なせないで下さい。そうではなく父上に対して私がいたしましたことをお許しいただき、父上のお目を私にかけていただきたいのです。私のために兄弟で仲間であるエドゥワルトをお目につけて、私の代わりにあの者を息子にお迎え下さい。もし父上がお亡くなりになる折に臨めば、あの者が跡継ぎにならねばなりません。聖霊が父上と一緒にいて下さいますように。母上によろしくお伝え下さい。」彼が誠実な仲間エドゥワルトに送った手紙にはこの追伸が同封されていた。「最愛の兄弟で友人であるエドゥワルト。不幸せなパリスはあらゆる不快に苦しんでいるんだ。僕パリスは全力をあげて君の愛を迎えるよ。僕たちも昔は愛と騎士道を手紙で書き合ったものだったな。でも、今は不幸とひどい冒険を手紙で書かなきゃならない。というのも、僕は異国にひとりで不幸せにしているからだ。喜びがすべて離れてしまったんだ。でも、僕が考えるのは昼も夜も麗しのヴィエンナ様のことだけだ。というのも、あの方が僕のためにひどく苦しんでいる

のではないだろうか。ほんとうに言おう。もしあの方が僕のためにとても悲しんでいるのが分かったら、僕自身も身を滅ぼすだろう。というのも、僕ひとりが苦しむべきで、他はだれも苦しむべきでないからだ。主なる神と諸聖人があの方をあらゆる災いから守り、あの方にりっぱに好意的に幸運を与えるように祈っている。あの方は十分に値するし、僕も望んでいるんだ。最愛の兄弟で仲間であるエドゥワルト。特に僕がジェノバで心配や悲しみや苦しみのうちに過ごしていると伝えてくれ。あの方の美しいきゃしゃな姿もなく、不幸がつきまとっているから、苦々しい死が僕を連れ去るがよいといつも思っているんだ。僕があの方に対してしてしまったことやあの方が僕のためにいわれなく不快にさせられたことを許してくれるように頼んでくれ。主なる神は僕の心と僕が抱える心配事をご存じだ。でも、僕たちの考えが神の御心にかなわないから、じっと耐えてゆかねばならないんだ。あの方にだれとも結婚しないで、冒険の終わりを見届けてくれるように伝えてくれ。さらに、エドゥワルト。父上と母上を慰め、君の両親だと思ってくれ。というのも、君は僕たちがどんな友情と愛で一緒に結ばれてきたか知っているからだ。父上と母上は僕の代わりに君を息子に迎え、財産の跡継ぎにすると手紙で知らせて下さった。エドゥワルト。父上と母上に従ってくれ。そうすれば、ますますいいんだけど。もしまた手紙を書いてくれるなら、父上の屋敷へ持って行ってくれ。聖霊が君と一緒にいて下さいますように。」すぐにパリスはドルフィンの国へ行く郵便配達人に手紙を渡した。郵便配達人は手紙を高貴な騎士エドゥワルトにひそかに渡した。さて、手紙にざっと目を通し、パリスがまだ生きているのを知ると、エドゥワルトは言い表せないほど楽しかった。ドルフィンに分からないように、郵便配達人をかくまった。手紙にざっと目を通すと、パリスの父ヤコブの所へ行き、息子パリスの知らせをどんなふうにしたかを話した。ヤコブは大喜びで、手紙を読むのをやめることができなかった。エドゥワルトに手紙を返し、パリスのために自分の身に起こった不幸をすべて手紙で知らせてくれるように頼んだ。エドゥワルトは麗し

のヴィエンナの所へ行ったが、彼女は恋人パリスについて考え込んで悲しそうだった。彼は言った：「尊いヴィエンナ様。どんなご気分ですか。」ヴィエンナが答えた：「ああ、昼も夜も高貴な騎士パリス様のことを心で考え、とても苦しいのです。と申しますのも、あの方がご存命か亡くなられたか存じないからです。あの方が亡くなっていたら、私はぜんぜん生きる気がいたしません。もし神様がお恵みを示して下さいなら、わずかのお金を暮らしに入り用なものとしてあの方にお送りするために、まだご存命でどこにいらっしゃるか存じることさえできれば良いのですが。エドゥワルトが話した：「ヴィエンナ様。もし彼についてほんとうに良い知らせを申し上げたら、何がいただけるのでしょうか。」ヴィエンナが答えた：「誓って。私にはこの世で愛しいものはございません。私の名誉だけはお断りいたします。」エドゥワルトは言った：「ご覧下さい。ここに彼が送ってきた手紙がございます。」彼女は自分の方に取って開けて読み、まるで神ご自身に会ったかのように上機嫌になった。なんとという喜びを彼女の心が受けたことか。彼女の顔を見ると、それが分かったのだ。というのも、彼女にとって恋人パリスが生きていること以外は何も大切なものがなかったからだ。彼女の上機嫌がしばらくの間続くと、エドゥワルトはパリスに返事を書こうと手紙を返してくれるように求めた。ヴィエンナは言った：「ほんとうに。エドゥワルト様が返事をお書きになるのが私には好ましいのですが、この手紙は私が持たねばなりません。エドゥワルトは言った：「ヴィエンナ様。私が求めるものはすべてくださると約束して下さいませんでしたか。」「はい。」と彼女が話した。エドゥワルトは言った：「他ではなく私の手紙をお返しいただきたいのです。」ヴィエンナが答えた：「この手紙については二度とおっしゃらないで下さい。と申しますのも、私はむしろ命を差し上げたいからです。でも、もし違ったものをお望みなら、それを差し上げます。」

[31.]

次に書いてある通り、エドゥワルトがパリスに返事の手紙を送った。「兄弟で友人である仲間パ

リス。ご両親からよろしくとのことだ。ご両親は君のために大きな災いと苦しみに耐えていた。特にお父上は長い間捕らえられていたんだ。財産もすべて取り上げられていた。でも、特に知っておいてくれ。君が活着ているのが分かると、ヴィエンナ様は喜んでいたぞ。というのも、気持ちすべて君の知らせに向けているからな。あの方はご自分の操が固いと伝えたがっている。心の底から君に会いたがっているんだ。ご自分のために君が災いやめんどろを受けないように願っている。そして、君の現状と冒険も手紙で知らせてくれということだ。君が切り抜けられるように、あの方は手形で三万クローネを送ってくれた。というのも、あの方の望みはすべて君だからだ。知っておいてくれ。あの方は長い間牢獄に入れられていた。神に賞賛あれ。あの方が元どおり出られたぞ。君の手紙をあの方に見せたんだ。それを見ても、あの方は返してくれなかった。手紙を失うぐらいなら、この世に持っているものをすべて失うほうがましだと言った。知っておいてくれ。彼女の父親がある者すなわちブルグント公爵の息子と結婚させたがっていて、日を追って望んでいるんだ。でも、私に言ってくれたように、ヴィエンナ様は君以外の者とは決して結婚しないと信じている。希望に満ちて喜びのうちに暮らしてくれ。パリス。僕は君がしてくれた願いにはとても感謝している。主なる神が君の魂を守って下さいますように。神が恵みの中に君を受け入れて下さるように祈っている。」この手紙を書き終えると、エドゥワルトは従者に渡した。従者はジェノバにいるパリスの所へ持って行った。

[32.]

この手紙を受け取って読み、ヴィエンナが捕らえられているのを知ると、パリスは特に納得が行かず、彼女の父親ドルフィンのをのしって言った：「ああ、邪悪で思慮のない父親め。あらゆる美德にあふれる気高い方を牢獄に入れることにお前の心はどうして耐えられるのだろうか。彼女が原因ではなく、すべて僕のせいなんだ。他のだれでもなく、私だけ苦しむのがふさわしいんだ。どうして神は私が彼女の代わりに牢獄に入れら

れるように取り計らって下さらないのだろうか。ああ、麗しのヴィエンナ様。私のためになんと苦しまれたことか。」彼女が元の状態に戻ったと書いてあり、彼は納得した。ヴィエンナが送ってくれたお金を受け取ると、美しい家を借り、高価な身なりをした。彼は町の名士と知り合って交わりを結んだ。そのため、彼らは大きな名誉を示した。しかし、彼はその愛をいつもヴィエンナに向けていた。一ヶ月もすると、彼らは手紙を書き合った。しかし、もし書いてあることについてお話ししたら、時間があまりにも長くかかりすぎましよう。

[33.]

ブルグント公爵の息子がヴィエンナと婚約しようとして来た様子。

物語によると：フランドル伯爵がブルグント公爵の息子の婚約を済ませると、公爵はドルフィンに饗宴にふさわしいものをどんなふうにも用意するか知らせようと息子を馬に乗った一行と一緒に彼の所へ遣わした。さて、ヴィエンナに愛を抱く者が来るのを知り、ドルフィンは手放しに喜んだ。娘ヴィエンナが必要とするものには高価なものを用意した。同様にブルグント公爵は息子に高価な身なりをさせた馬と同伴者を与えた。彼をフランドル伯爵の所へ遣わした。伯爵は二日間りっぱに彼を迎えた。彼に息子を同行させ、ドルフィンの所へ遣わした。彼らの到着を知ると、ドルフィンが高価なものを用意した。一日走って彼らがヴィエンナへやって来ると、ドルフィンはたくさんの騎士と一緒に彼らに向かって走って行き、大喜びで彼らを迎えた。それにもかかわらず、ブルグント公爵の息子の所へ行く前に、ドルフィンはず妻と一緒にヴィエンナの部屋へ行った。彼女に言った：「ああ、美しい娘ヴィエンナよ。主なる神様のお気に召すままに、私とお前の母は七年間一緒にいたが、跡継ぎを得るには至らなかった。だが、八年目に神様はお前をして私たちを喜ばせて下さった。私たちの心は大喜びだった。というのも、お前以外に息子も娘もないからだ。もう得ることもないだろう。私たちが気に入った威厳のある花婿とお前を結婚させるのはごく当たり前のことだ。ほんとうに言おう。フランス王のご

令嬢はお前が結婚する者と結婚したがっているんだぞ。というのも、主なる神が騎士であれば持ち合わせるたくさんの美德を彼にお与えになったからだ。私たち二人は神とその敬愛する母マリアの御心によって、ブルグント公爵の息子とお前の結婚を実現させた。これに同意して、あの者を威厳のある者と思ってくれ。」ヴィエンナが父親に答えた：「尊いご領主でいらっしゃるお父様。もしこれが私のためにならなかつたり、私を幸せにしなかつたら、お父様はきっとなさらなかつたはずですよ。今よりも高い地位に上げて下さる方と結婚できる年齢になりましたが、私は目下のところ結婚できないのです。もしそんな方が私たちの所にいなければ、神様の御心で同じくらいまたはもっといい方が来られます。お父様。弁解のために申し上げているとはお考えにならないで下さい。でも、私はこの十四日間体調がすぐれないのです。そのために私は何も喜べません。こんな病気でいる間はこの方とも他のどなたとも結婚しないと神に約束いたしました。」ドルフィンがヴィエンナが乙女の恥ずかしさからこう言っているのだと思った。彼女に災いを及ぼさなかつた。しかし、彼女はどんなことがあっても同意しようとはしなかつた。というのも、彼女は心をパリスの方にだけ向けていたからだ。

[34.]

翌朝にブルグント公爵の息子とフランドル伯爵の息子がヴィエンナの町へやって来た。ドルフィンはそれを喜んだ。およそ十四日間踊りや歌や他にも娯楽を備えた大きな祝宴が開かれた。その祝祭と饗宴が終わると、ブルグント公爵の息子が乙女と婚約するのにどうして長い時間がかかるのかと不思議に思わないように、ドルフィンは時間に嫌気を起こさないように頼んで言った：「実を言えば、娘はほとんど話せないほどの病なんだ。この婚約について聞くと、げげんそうになって乙女の恥ずかしさから自分の部屋から他の場所へ行こうとしたんだ。」公爵の息子はそれを簡単に信じた。というのも、人がよかつたからだ。しかし、ドルフィンの勢いは弱まらず、昼も夜も娘に公爵の息子に同意するように攻め立てた。あると

きはすばらしい話で、またあるときは脅し文句で彼女に考えを変えさせようとした。しかし、彼女に同意させることはできなかつた。彼女の父親は水とパン以外は与えないように命じた。万事どうしようもなかつた。というのも、彼女を不快にすればするほど、その決意はますます固くなつたからだ。これに気づくと、ドルフィンが公爵の息子を国に帰そうと考えた。というのも、もし公爵の息子がこれ以上とどまったら、ヴィエンナが同意しようとしなければ知られるのではと恐れたからだ。ドルフィンが彼に高価な宝石を贈って言った：「息子よ。私が言おうとすることを悪く取らないでもらいたい。今のところ、そなたと娘の婚約はかなわないようだ。神の御心が行われるように。娘の病は思っていたよりも重いようだ。私にはそれがお前のために残念だ。」そう聞くと、ブルグント公爵の息子はドルフィンに別れを告げて国へ帰った。ドルフィンはヴィエンナが元気になったのが分かたら、すぐに伝えると彼に約束した。ドルフィンが約束してくれたように、彼は戻ってきて婚約を果たすことにした。

[35.]

ヴィエンナが公爵の息子に同意しようとしなないので、ドルフィンが彼女を塔の中に捕らえて入れておいた様子。

公爵の息子がいらいらして出発すると、すぐにドルフィンは建築職人を呼び寄せ、宮殿の中に小さな薄暗い牢獄を作るように命じた。用意ができると、ヴィエンナとイザベルをその中に閉じ込め、必要なものとして水とパン以外は与えないように命じた。二人はしばらくの間牢獄で暮らした。ヴィエンナが決意を変える訳はなく、その気持ちはますます恋人パリスに向けられた。いつもイザベルを慰めて言った：「イザベル。お前はこの薄暗い場所に驚かないの。主なる神に信頼するわ。この苦しみのために大きな好意と美德がお前に降りかかるように。だって、イザベル、ほんとうに。私のために苦しんでいる高貴な騎士パリス様のために私が苦しむのはごく当たり前のことよ。」彼女らはそう慰め合った。

ブルグント公爵の息子が麗しのヴィエンナに会いに国からやって来た様子。

ドルフィンと別れてしばらくの間国にいと、ブルグント公爵の息子は時とともにヴィエンナの非常な美しさが頭から離れなくなった。ヴィエンナと会うことも話すこともせずにドルフィンと別れたことを後悔した。もう一度彼女の所へ行って会うことに決めた。彼はドルフィンに国そしてヴィエンナの町へやって来た。ドルフィンはとても敬意を込めて迎えた。彼はドルフィンにどんなに病気であってもヴィエンナに会わせてくれるように頼んだ。というのも、世界中の喜びの中で特に望んでいたからだ。そう聞くと、もはや心の内を包み隠すことができないのがドルフィンには分かった。ドルフィンは答えて言った：「息子よ。神からいただいたすべてにかけて、この婚約が成立するのを見たかったぞ。だが、娘は目下のところだれとも結婚しようとはしない。私にはそれがお前のために納得できない。知ってもらいたい。私のせいではない。私の言うことを信じてくれ。お前がここから離れて以来、娘は牢獄に入って水とパン以外は口にしていない。お前との婚約に同意しない限り、私は娘を出さないと誓ったんだ。今お前が娘と会えないのも悪く取らないでくれ。というのも、もし娘とでなくてもお前はきっと身分に依じていつでも高貴な結婚ができるからだ。」ブルグント公爵の息子が答えた：「尊いご領主様。ここをおいとまする前に彼女と話ができるのですから、心地よい話で気持ちを変えられるか試してみます。」ドルフィンは「よし。」と言った。娘に身支度をするために他の衣服を、そして食べるために料理を送った。というのも、彼女は二ヶ月間水とパン以外は食べていなかったからだ。そのために彼女はやせて顔に表れていた。ブルグント公爵の息子が話しに来るというのを知ると、ヴィエンナが侍女イザベルに言った：「イザベル。ご覧。お父様とお母様は着替えと鶏の肉で私に心変わりさせようとなさっているわ。私のそうすることが神様の御心にかないませんように。」彼女は鶏肉を持って来た者から受け取って言った：「あの方が私と話がしたいとお望みなら、

三日後にいらっしゃって、聖ラウレンチオ教会の司教様以外はどなたもお連れにならないようにお伝え下さい。」使いの者は彼女の父親と母親にそう伝えた。ヴィエンナは鶏肉4分の1ポンド二切れを取って胸の下にしまい、腐ってにおいを発するようにそのままにしておいた。三日目に司教と公爵の息子がそこへ行った。そこへやって来ると、ヴィエンナに会おうと格子窓を開けた。公爵の息子は彼女に同情して話した：「ああ、気高いヴィエンナ様。どうしてご自分で死のうとなさるのですか。それはヴィエンナ様にとって大きな罪になります。もしお父上が約束して下さった私たちの結婚に同意なさらないければ、ご自分の硬くなった心で間違いを犯し、重い罪を犯すことになるのです。お父上とお母上になさった不服従を主なる神が処罰なさるとお思いにはなりませんか。いかなる理由で私と結婚なさらないかおっしゃって下さい。もしヴィエンナ様が私と一緒にになったら、お望みの喜びや自由を私が認めないとでもお思いでしょうか。悲しみに満ちてご自分で死のうとなさらないで下さい。もし私のためにやめようとなさらないのなら、お父上とお母上のためにおやめになって下さい。お二方はヴィエンナ様がおきてに従ってくれるように、あなたのためにとでも不快のうちに暮らしていらっしゃいます。そう聞くと、ヴィエンナが答えた：「領主様。あえて申し上げれば、私はあなたと結婚しても心に抱いている方を忘れられません。あなたは私よりも高貴な身分の婦人にふさわしい方であって欲しいのです。それにもかかわらず、私は望む方への愛のために今よりもずっと耐えられます。もうお言葉になさらないで下さい。私の身体は醜いのです。もししばらくの間続けば、私の命はもう長くありません。ほんとうだということをお見せします。いっそうよく私を信用していただくために、少しだけ近くにいらっしゃって下さい。」彼女に近づいて身体の腐ったにおいに気づくと、彼らはその胸から出るにおいにほとんど耐えることができなかった。彼女は胸の下に腐りきった鶏肉4分の1ポンド二切れをしまっていたのだ。彼らは彼女にとっても同情して別れを告げた。彼女はもう腐敗しそうで腐ったにおいを発しているとドルフィン

に言った。もう生きているべきではなく、とびきりの美しさのために大きな損だと彼らは思った。公爵の息子はドルフィンに別れを告げて国へ帰り、起こったことをすべて父親に話した。そう聞いた者はみな彼女を気の毒に思った。

[37.]

さて、公爵の息子と自分の娘の間で結婚が解消されたのが分かると、ドルフィンはどれほど長くなってもかまわないので、彼女を生きて牢獄から出さないと誓った。彼女は長い間悲しみと心配に満ちて牢獄にとどまっていた。恋人パリスの知らせが欲しかったが、まだ届かなかった。ヴィエンナが苦勞して暮らし、だれもあえて話もしないのが分かると、パリスの仲間エドゥワルトは彼女に抱く同情から宮殿の近くの教会に礼拝堂を建てた。宮殿に向いている側に穴をあけたので、彼は牢獄がある基礎へやって来た。気づかれぬように、穴を打ち抜こうとはしなかった。礼拝堂が完成すると、エドゥワルトは自身で穴を打ち抜いた。スライド開閉式の窓を作り、ヴィエンナと話した。さて、エドゥワルトが初めてヴィエンナと話すと、彼女はまるで死からよみがえったかのように喜んだ。まずもってパリスの知らせがないか尋ねた。エドゥワルトが答えた：「ジェノバにいる彼から手紙を受け取ったのは最近です。」ヴィエンナが泣きながら話した：「ああ。あの方にもう一度お会いできる日はいつ来るのでしょうか。主なる神が御心に従ってなさることに納得いたします。と申しますのも、他は何もこの世で欲しくないからです。「ああ、エドゥワルト様。私の暮らしとこの『美しい』部屋はいかががかしら。ほんとうに、私は思います。もし私がパリス様のためにつらい目にあっていると知ったら、あの方の心臓は同情ではりさけるでしょう。」彼女はエドゥワルトに腐った鶏肉の話伝え、パリスに身も心もささげ、彼以外のだれも望まないと言紙で知らせてくれるように頼んだ。それからエドゥワルトはときどき食べ物や飲み物や彼女が必要とするものを運んで来て、できる限り彼女を慰めた。エドゥワルトはパリスに、もし用心していなかったら、ヴィエンナは何日も前に苦しみで死んでいただろう

と手紙で知らせた。ブルグント公爵の息子とヴィエンナの話や、ヴィエンナがパリスに会うこと以外はこの世で何も望まず、約束が解消されないように望んでいると言紙で知らせた。

[38.]

エドゥワルトから手紙を受け取り、ヴィエンナが牢獄に入れられているのを知ると、気高いパリスは彼女の苦しみのために少なからず心配した。しかし、ときどき彼女が大きな苦痛のために他の人と結婚するのではないかと思って言った：「この苦しみからは逃げられない。きっとヴィエンナ様は結婚させられる。二人の愛は引き裂かれるんだ。ああ。僕はどうなるのだろうか。遠くをさすらっているから、あの方の知らせも聞かないし、あの方も私の知らせをご存じなからう。」いぜんとして再び嘆き始めた：「ああ、真実の神よ。どうしてあの方に代わって苦しみに耐えられるように恵みをかけて下さらないのか。ああ、心配と苦痛に満ちた気まぐれで無慈悲な運命よ。重い罰をこうむらねばならないとは、善良なヴィエンナ様が何をしたというのか。無罪のあの方よりも悪事を行った私がこうむるのがもっともではないか。ほんとうに。そうだ。」

[39.]

パリスが仲間エドゥワルトに最後の手紙を送り、ヴィエンナがいつも悲しんでいるので、彼女を慰めるように命じた様子。

嘆き終わると、パリスはエドゥワルトに手紙を書き、捕らえられているヴィエンナを心配していると伝えた。彼女にしてくれた親切に感謝して、なお助けと慰めで彼女のことを忘れないように頼んだ。不安な考えを吹き払おうと異国をさすらわねばならないと書いた。まるで自分が死んだかのように、もう手紙も書かず、もう考えないで欲しいと書いた。手紙を受け取って読むと、エドゥワルトは口では言い表せないほどに悲しんだ。パリスの両親の所へ行き、手紙を読ませた。彼らもほとんど感情を抑えきれず、ひどく腹を立てた。彼は麗しのヴィエンナにも話した。その悪い知らせを聞くと、もしエドゥワルトが慰めなかったら、

彼女は苦痛で死んでいただろう。イザベルにぐちをこぼし、恋人パリスの知らせは期待せず、望むのは死ぬことだけだと言った。というのも、もはや彼女にはこの世で何の喜びもなく、もう死んでしまったらと望んでいたからだ。しかし、イザベルは彼女を慰め続けた。

[40.]

従者と一緒にヴェネツィアにいたパリスが船で聖地へ旅に出た様子。

パリスはジェノバから離れ、ヴェネツィアへ行った。従者と一緒に船で行き、アレクサンドリアへやって来た。彼はしばらくの間とどまり、エルサレムへの道を教えてもらい、サラセン語の会話を習った。それができると、従者と一緒にインド、そして教皇ヨハネの地へ航行に出た。彼はひげが長く生えるまで長い間そこにとどまり、サラセン風の身なりをして、彼らの一人として一緒に暮らした。しかし、主イエス・キリストを固く信じ、神の母マリアに敬意を表した。巡礼を果たそうとエルサレムにある主の墓へ旅しようと決心した。エルサレムへやって来ると、彼は気持ちのすべてを信心に向けた。主なる神様に魂の至福と命の庇護を祈り、その悲痛な受難に感謝して、ヴィエナのためにも祈った。そこから旅して、サルタンの支配下へやって来た。お金もすっかり使い果たした。彼は家を借り、少しの間大きな心配や苦しみのうちに暮らしていた。特に他の者が華やかに暮らすのを見ても、資金不足のためにあきらめねばならなかった。ある日戸外を見て回っていると、パリスはサルタンの鷹匠に出会った。鷹たちが飛び立つと、病気の鷹がいた。サルタンが最も愛しているうちの一只だった。パリスはそれが病気かどうか、またどこが悪いか尋ねた。鷹匠は分からないと言った。パリスはその鷹をまじまじと見て、忠告通りにしなければほんとうに三日も生きることができないのに気づいた。もしそれで元気にならないなら、快復できないだろう。鷹匠は言った：「どうしたら助けられると思いますか。あなたの利益は約束します。というのも、サルタンは鷹を失うぐらいなら最も優れた町の一つを失う方がましだからです。」パリスはある種類の薬草

を探して鷹匠に与え、鷹の足に結びつけるように言った。彼がそうすると、鷹は以前のように元気になった。サルタンは喜び、鷹匠を宮廷の領主にした。鷹匠はパリスの教えによって大きな名誉を受けたと認めた。ちょうどまるで兄弟のように大いに交わりを結んだ。彼がサルタンの寵愛を得られるようにしてくれたので、パリスは宮廷に迎え入れられた。サルタンは彼に大いに目をかけ、重要な役職に就け、大きな敬意を表した。

[41.]

その頃インノセントという聖なる教皇が聖なる教会を統治していた。神への奉仕が広まるように、異教徒に対して十字軍遠征を行おうと考えた。彼は枢機卿、司教、そして市参事会員と一緒に市参事会を開いた。フランス王、他の国の王、そして諸侯あてに手紙を書き、助けをもとめることに決めた。

[42.]

ドルフィンがフランス王の所へやって来て、王がサルタンの地を探ろうと彼を海の向こう側へ遣わした様子。

教皇の手紙を受け取ると、フランス王はヴィエナの町のドルフィンに話をしに来てくれるように頼んだ。彼が来ると、王は言った：「ゴットハルトよ。そなたは市参事会によって賢い者の一人と認められたから来てもらったのだ。知ってもらいたい。聖なる教父である教皇の親書によると、異教徒に対して十字軍遠征を行おうとお考えのようだ。その地を調べるために、そなたが神に敬意を表し、遠征を引き受けてくれ。」ドルフィンが答えた：「王様。もし御意にかなうのであれば、心から用意はできております。ですが、サラセン人の国中をどんなふうにも歩き回れとおっしゃるのですか。私は存じません。と申しますのも、もし彼らの地を探りに来たとき気づかれたら、主なる神が守って下さらない限り、私の身にひどい死が降りかかるからです。」王が答えた：「そなたと一行はきっと巡礼者のように歩き回れよう。知っての通り、これはキリスト教徒が行う最初の遠征ではない。主イエス・キリストの名によって遠征を

引き受けてくれ。そなたの好きなように、たくさんの騎士と一緒に連れて行け。」王の敬虔な望みからすぐに旅せねばならないのが分かったと、ドルフィンが聖なる町エルサレムへ巡礼に出かけようと聖なる地へ旅せねばならないという手紙を妻ディアネに送った。彼が帰って来るまで、国を守ってヴィエンナを自由にしないように命じた。というのも、すぐに帰って来ようと思っていたからだ。

[43.]

ドルフィンが海を渡って聖地エルサレムへ行った様子。

ドルフィンはガレー船で海を渡り、シリアとダマスカスを通してエルサレムへ行った。その国を十分に見て、巡礼者に話をしてもらい、自分の考えを少し打ち明けた。悪意のあるキリスト教徒がいた。彼らはお金と贈り物を手に入れようとサルタンに告げ口した。それを知ると、サルタンは秘密にした。しかし、巡礼者がいつも食べ物を買っていた場所をひそかに包囲した。そのため、ドルフィンと一行はエルサレムから遠く離れていないラモンという町で捕らえられた。すぐにサルタンはドルフィンを前に連れて来させ、彼を苦しめるように命じた。それを知ると、ドルフィンは苦しめないように頼んだ。真相のすべてを認めようとした。教皇がサルタンの国民に対する十字軍遠征を決め、その国を探るために自分が遣わされたことと彼の前で認めた。そう聞くと、サルタンは彼をアレクサンドリアの頑丈な牢獄へ連れて行き、水とパン以外は与えないように命じた。その間にその国を探りに来た者みなに見せしめになるように、どんな厳しい死で彼を裁こうか考えようとした。ドルフィンはアレクサンドリアに連れて行かれ、頑丈な塔に入れられた。そこには彼を監視する見張りが置かれた。しばらくの間悲しそうに暮らし、生きてそこから出ることはなかろうと考えた。教皇とフランス王は一切合切で彼を救出しようとして大変な苦勞をしたが、何とも仕方がなかった。というのも、サルタンがその国を探りに来た者みなに見せしめになるように彼を裁こうと指示したからだ。

[44.]

二人の修道士がバビロニアでパリスに出会い、ドルフィンという侯爵がアレクサンドリアでどんなふうにも捕らえられたかを話して、彼が驚いた様子。

さあ、何も知らなかったパリスについて話しましょう。パリスはバビロニアにいた。フランシスコ修道会の二人の修道士が巡礼のためにバビロニアをさすらい、町とサルタンとその支配力を見ようととどまっていた。というのも、彼はとても権力があつたからだ。この二人の修道士つまり兄弟は海のこちら側の出身だった。偶然パリスに出会った。彼はあいさつして、キリスト教徒の新しい情報を尋ねて言った：「あなたたちキリスト教徒には権力のある教皇がいるという話を聞いています。たくさんの大きな町や城を持ったたくさんの王や領主や侯爵もいると聞いています。あなた方の宗教に属さない私たちが、おっしゃるようになんかあなた方に属すべき聖なる地を所有することに耐えられるのが不思議なのです。」パリスの話を聞くと、二人の修道士はサラセン語で答えた。というのも、彼がその国民だと思ったからだ。「ほんとうに。司牧者である教皇様が十字軍遠征を行ったので、海のあちら側ではよろいを着けた者が大勢集められ、この国へやって来ようとしていとお聞きになっていると思います。その間に人が集まってきて、国々で最も権力のあるフランス王はこの国を探ろうとヴィエンナの町のドルフィンという気高い方旗騎士を遣わしました。彼がこの国に入ると、サルタンは巡礼者がいつもさすらっていた町を包囲しました。彼はラモンという町で捕らえられました。そこからアレクサンドリアへ連れて行かれ、ひどい牢獄に入れられました。すでに亡くなっていると思います。こんなふうにしてその遠征は知れ渡りました。」パリスは領主の名前がなんというか尋ねた。修道士は彼の名前はヴィエンナの町のドルフィンであるゴットハルト・ダレンゾネだと答えた。そう聞くと、パリスは特に驚いた。ふさわしくないにもかかわらず、自分の運命が良くなればいいがと特に思った。彼は他にもたくさんのことを尋ね、別の時にもっと

一緒に話したいと言った。どこに泊まっているか尋ねたが、彼らは言いたがらなかった。というのも、彼がキリスト教徒について他のことを尋ねるのではと恐れたからだ。

[45.]

さて、修道士と別れると、パリスはどんなふう
にアレクサンドリアへ行ってドルフィンと話し、
どんなふう
に彼を牢獄から救い出すか
心で考えた。修道士が
いる宿屋へ行くことに決めた。彼は
その手を取り、一緒に町中を散歩して、いろいろなことをすべてサラセン語で話した。アレクサンドリアで捕らえられているキリスト教徒の騎士を牢獄から救い出せるかどうか、彼に会ってみたいと言った。そして、言った：「もし一緒に来てくれるなら、勇敢さをお見せしましょう。あなた方に悪いことは起こりません。信じて下さい。」修道士は怖くて、どう答えたらいいか分からなかった。しかし、彼らは主なる神様に頼った。たとえ死ぬことになっても、彼らは一緒に行くこと約束した。ドルフィン
を牢獄から救い出そうと二人の修道士は主なる神様が恵みをかけて下さるように祈った。パリスは修道士の答えに喜んだ。しかし、ドルフィンに会うべきではないと思ったが、それでも冒険してみようとした。彼は修道士と別れた。よく知っているサルタンの鷹匠の所へ行って言った：「鷹匠様。あなたが示してくれたご好意に心から感謝します。知ってもらいたいです。私はアレクサンドリアへ旅しようと決めました。あなたに抱く愛と友情によって長い間はとどまらず近いうちに帰って来ます。この国には知り合いが一人もいないので、私が国中を安全に旅できるようにサルタンが命じる通行許可証を手に入れて下さい。だれも悪意のある者から自分を十分に守れないからです。領主サルタンのすばらしい寵愛が得られるように私を薦めて下さい。」鷹匠はサルタンの所へ行き、パリスの望みを打ち明けた。サルタンはパリスが別れようとしているのが残念だと言った。もし宮廷にとどまるなら、彼を領主にしようとしていた。鷹匠は言った：「徳の高いサルタン。彼は近いうちに帰って来ます。」サルタンはパリスが望むように、国や町や城の代

官や部下はすべて彼に敬意を表し、必要とするものを送り、その代わりに金も銀も何も受け取らないように命じた通行許可証を作らせた。サルタンはパリスに金と絹でできた高価な衣服、それにまた宝を一緒に与えた。とにかくできる限り早く帰って来るように命じた。サルタンは彼を領主にすると約束した。自分の手で署名して印で封印した通行許可証を手渡した。

[46.]

パリスがフランシスコ修道会の二人の修道士と一緒にアレクサンドリアへ旅して、提督によって好意的に迎えられた様子。

宮廷に別れを告げると、パリスは二人の修道士と一緒にアレクサンドリアへ旅した。そこへ行ったらすぐに提督に保護状を見せた。それを讀むと、彼は敬意を表し、必要なものが用意のできた高価な家を与え、修道士にも家を与えた。提督は相手をしようとして毎日パリスの所へやってきました。その間に彼らは町をあちこち馬で走って見て回った。高価な身なりをしていたので、だれもがパリスに敬意を表し、彼は領主の息子に違いないと言った。ある時、町を歩き来していると、彼らはドルフィンが捕らえられている塔の近くを通り過ぎた。パリスはあの美しく見える塔は何かと提督に尋ねた。提督は恐ろしい牢獄で、サルタンがこの国を探りに来た海の向こうの国の領主と男爵を捕らえていると答えた。パリスは言った：「彼に会いに行かせて下さい。」彼らは馬から降り、塔の中へ入って行った。ドルフィンを見ると、パリスは彼が受けている苦しみで悲しくなった。パリスは見張りに彼が何者か尋ねた。彼らはフランスの男爵だと答えた。パリスは彼もサラセン語が分かるか尋ねた。彼らは言った：「いいえ。」しかし、もし彼が言葉をかけるなら、通訳を連れて来ようとした。パリスは別の時に戻り、海の向こうの国がどんなふうか尋ねたいと答えた。彼と話しに来るのを見張りが認めてくれるように提督に頼んだ。するとそうになった。彼らは見張り
と別れた。じきにパリスは戻り、サラセン語を話すことができる修道士を連れて来た。彼らがそこに入ると、修道士に丁寧にあいさつするように命じた。修道士は

パリスがフランス語が分かるのを知らなかった。修道士はこの方は慰めに来て、キリスト教徒に好意的で、またサルタンのもとで大きな寵愛も得ているとドルフィンに言った。まるで自分の国の者のように彼を信じていた。こんなふうに修道士はパリスの代わりにいろいろドルフィンに尋ね、もし役に立つことができるなら彼は喜んですると言った。

[47.]

さて、修道士がこのサラセン人についていろいろ話すのを聞くと、ドルフィンは特に驚いて、牢獄からの救出を気にかけてくれるように主なる神様に祈った。パリスはヴィエンナの知らせを聞ききたがり、妻や子がいるか彼に尋ねるように修道士に命じた。ドルフィンは自分には妻とフランス中で最も美しいと思われた娘が一人いて、だれとも結婚したがないので、牢獄に入っているため息をつきながら言った。パリスは彼を慰めて苦しみのうちにも辛抱強くするように修道士に言った。主なる神様が牢獄から救い出して下さると言った。この話でドルフィンの心は軽くなった。パリスがキリスト教徒でないのは残念だと修道士に言い、主なる神様が彼に慰めを与えて下さるように祈った。彼らは慰め合って別れた。パリスはその捕虜の助けを借りておしゃべりして過ごしたので、しばしばおしゃべりに彼の所に戻らねばならないと見張りに言った。見張りは「はい。」と言った。パリスは彼らと別れた。パリスが修道士に言った：「もしあなた方が信頼できて固く信用できるのが分かったら、あの捕虜を牢獄から救い出そうと思います。」そう聞くと、修道士が驚いて答えた：「誓って。主なる神様と契約を結んでいる信仰にかけて、あなたが疑わなくてもいいように保証します。」でも、これは他人にもらさないようにして下さい。というのも、ご存じの通り、彼は一日中見張られているからです。」パリスは言った：「私に名案があります。私たちには二つのことが必要です。一つはあなたたち二人が私と一緒に旅してくれることです。もう一つは、もし私が彼の国へ行ったら、彼が私のために全生涯誠意をもって心配りしてくれることです。でも、

もし救い出しても国へ帰ったら、彼は私に何も持たせないのではないのでしょうか。私は仕事もできず、暮らしをたてようにも働くこともできません。受け入れられないでしょう。そうしてもらえると十分な確認をとりたいのです。もし私が彼の国へ行っても、私が求める施し物を与えて欲しいのです。もしこれを約束して下さったら、彼を救い出し、そのために国を捨てます。私がどんな現状かご存じの通りです。」

[48.]

翌日パリスと二人の修道士は牢獄に戻ってきた。パリスが言ったように、修道士はドルフィンにすべてを話した。そう聞くと、ドルフィンは神の働きだと認めて言った：「このサラセン人が私に抱いてくれる好意に幾重にも感謝します。というのも、この方の役にたったこともないのに、こんな善意の尽力を申し出て下さるからです。ですが、もしこの方が私をここから救い出すことが神の御心なら、主イエス・キリストの身体にかけて誓う用意ができています。私の国へ帰ったらすぐにここよりも重要な地位に置き、彼の思い通りにさせます。というのも、もし妻に心配りできたら、私には十分だからです。私はこの方が望むことをすべてします。私のためにこの方にそう言って下さい。」修道士はパリスの所へ行き、そう言った。パリスは確信しようとドルフィンに主イエス・キリストの身体にかけて誓ってくれるように望んだ。ドルフィンはそうした。パリスはますます納得しようと自分でキリストの身体を受け取り、もし彼が国に帰ってすぐに約束をすべて守らなかったら、秘跡の拝領が永遠の断罪になると言った。これが済むと、パリスは海を渡ってその国へ旅するガレー船があるか調べようと二人の修道士と一緒に海辺へ行った。幸運にもガレー船の用意ができていた。彼らは船主に話し、五人を渡してくれるように千グルデンを約束した。船主はそうするが、あらかじめ半分のお金をくれるように言った。そして、言った：「急いで下さい。というのも、もしこの国のサラセン人に捕らえられたら、みな死なねばならないからです。」パリスは用意しなければと言った。というのも、次の日の真夜

中に行くつもりだったからだ。パリスは二人の修道士と一緒に宿屋へ戻り、おいしい食べ物、いちばん良いワイン、他にも必要なものを用意した。

[49.]

パリスがアレクサンドリアの牢獄からドルフィン
を救い出した様子。

すべて用意ができると、パリスは牢獄の見張りの所へ行って言った：「見張りの方々。私に示してくれたご好意に非常に感謝しています。今から威厳ある領主サルタンの所へ旅します。でも、まずもって今晚、一緒に食べて楽しみたいのです。お断りにならないで下さい。」彼らには好ましかった。パリスは食べ物と飲み物を取って来させた。彼らは食べようと座った。ワインを飲むのに慣れていなかったの、見張りは酔っ払った。ぐっすり眠っていたので、彼らがしていることを聞いていなかった。それを見ると、パリスは修道士に捕虜を鎖から解放して、錠を開けるように命じた。「ここで見張っています。」と彼が話した。「もしだれかが気づいたら、私がすぐに殺します。」修道士はとても不安そうにドルフィンからかせをたたき落とし、主が助けて下さるように祈った。彼を解放すると、彼らはサラセン人が着ているように衣服を着せた。もし目を覚ましたらあとを追うといけなないので、パリスは見張りをみな次々と殺した。

[50.]

ドルフィンとパリスが二人の修道士と一緒に船
の所へ行った様子。

ドルフィンとパリスと従者と二人の修道士は港へやって来て、船の所へ行った。帆を揚げて帆走したので、すぐにレバントへやって来た。そこはみながキリスト教徒であった。牢獄と海で疲れていたの、ドルフィンが陸に上がった。そこで彼がお金を借り、それを使って彼らはキプロスへやって来た。フランス王の宮廷で暮らしたことがある王がいた。ヴィエンナの町のドルフィンが来たと聞くと、彼は出迎え、宮殿の自分の所へ来てくれるように頼んだ。ドルフィンが喜び、彼に敬意を表し、そうしたのだった。というのも、彼ら

はフランス王の宮廷で知り合いだったからだ。王が旅のことを尋ねたので、ドルフィンがみなすべて話した。彼にとどまる気がある間、王は喜んで大きな饗宴を催し、彼をととても楽しませた。しばらくの間聞くと、彼は王に別れを告げ、敬意と親切に感謝した。ドルフィンが出発しようとするのを知ると、王はりっぱな贈り物を贈り、二隻のガレー船を用意して、彼を案内しようとするよろいを身に着けた者を同行させた。神の御心に従って風があったので、彼らはすぐにエーグ・モルトへ帰って来た。

[51.]

ドルフィンとパリスがフランスの国民によって
大きな栄誉と喜びで迎えられた様子。

さて、ドルフィンがエーグ・モルトへ帰って来ると、知らせがドルフィンの国へやって来た。騎士はみなよろいを身に着け用意してエーグ・モルトへやって来て、大きな敬意を込めて彼を迎えた。彼と一緒にヴィエンナの町のヴィエンナの所へ行った。国民は大喜びで十五日間みごとな饗宴を催した。パリスは着替えなかった。素性も明かさず、長いひげを生やして毎日ミサへ行った。国民がドルフィンのために彼に敬意を表したので、彼は困惑してしまった。少しあとでドルフィンはパリスに国の支配をゆだねるという約束を守ってくれるか尋ねた。というのも、約束を守る用意ができていたからだ。パリスはドルフィン自身が国を保ち、自分にはそれで十分だと答えた。ドルフィンは娘ヴィエンナを妻としたいか尋ねた。パリスは、もしそれでよければ、そうしたいと答えた。彼らはヴィエンナの所へ行った。彼女のもとへやって来ると、最初にフランシスコ修道会の修道士が話した：「ヴィエンナ様。ご存じの通り、ご領主であるお父上は長い間捕らわれていました。もし主なる神とこの方がお命を救おうと大きな危険から救い出して下さらなかつたら、まだ捕らわれているでしょう。ご存じの通り、お父上はヴィエンナ様がおっしゃることをよく聞いて下さるのを望んでいらっしやいます。ヴィエンナ様がいつもお示しになったご好意によって、このサラセン人と結婚してくれるように願っていらっしや

います。ヴィエンナ様が昔からお父上に対してなさってきた非行をすべてお許しになられます。お父上がこの方に対して永遠に従順の義務を負っていらっしゃることもお考えにお入れ下さい。」

修道士の話の聞くと、ヴィエンナが彼に答えた：「この町にいらっしゃる聖ラウレンツィウス教会の司教様は、もしこのサラセン人よりも父上がたくさんのお名譽を受けられる方を私が望んでいたなら、ずっと前に好ましい結婚をしていたのをご存じです。と申しますのも、もし私が同意していたら、ブルグント公爵様のご子息が私をもらっていらっしゃったでしょう。でも、主なる神様は私をこんな病気で床におつかせになりました。そのため、私はもうこの世で長くは生きられません。日一日とますます気がめいり、もうなかば腐ってしまいました。領主である父上にお怒りにならないようにおっしゃって下さい。と申しますのも、私はどなたとも結婚しないからです。」

そう聞くと、ドルフィンがサラセン人にそう言ってもらいたいと修道士に言った。そう聞くと、パリスはヴィエンナへの愛が失われるように思った。修道士と聖ラウレンツィウス教会の司教と一緒に牢獄の彼女の所へ行った。彼女が醜いを見ると、彼は大きな同情を抱き、修道士の手を借りてあいさつして、言った：「ヴィエンナ様。ご存じの通り、私がお父上を牢獄から救い出しました。お気に召していらっしゃるでしょう。もしそうしなかったら、お父上はまだそこにいらっしゃるでしょう。お父上はヴィエンナ様がくり返しなさったことをすべて許そうとなさっています。結婚して下さい。お父上は私たちをドルフィンの国の領主にしようとなさっています。この名譽をお断りにならないで下さい。たとえ事実とは違って、お父上のおっしゃることをよくお聞き下さい。」

ヴィエンナがパリスの代わりの修道士に答えた：「あなたが父上を牢獄から救い出して下さったのは存じております。父上が十分にお報いになりますから、あなたは苦情をおっしゃらないでしょう。とても威厳がある方で、たくさんの慈善に値して、私よりも高貴な身分の方にふさわしいのも存じております。でも、ここにいらっしゃる聖ラウレンツィウス教会の司教様は病氣のために私をも

う長く生きられないのをご存じです。」

パリスは自分がサラセン人なので、彼女は追い返すのだと修道士の助けを借りて答えて言った：「キリスト教徒になると約束いたします。もし私の正体やお父上を牢獄から救い出そうとして何をあきらめたかご存じになったら、今よりも私をふさわしい者とお思いになるでしょう。お父上はヴィエンナ様を妻にして下さると約束して下さいました。もしヴィエンナ様のご同意なさらなかったら、お父上が偽りの誓いをなさったことになります。」

ヴィエンナが答えた：「あなたのたくさんの美徳の話は伺っております。それにもかかわらず、私の病氣に気づくと、どなたも私に結婚を勧めません。と申しますのも、私の命が長くは続かないからです。私の話がほんとうだとお気づきになるために、少し近くにいらっしゃって下さい。私の命が病氣のどんな危険にあるかお分かりです。」

彼らは彼女の少し近くへ行った。ヴィエンナはまたもや鶏肉4分の1ポンド二切れを胸の下にしまっていた。そこから腐ったにおいがしてきたので、司教も修道士も耐えることができなかった。しかし、パリスにはにおいがしなかった。他の者はそれに驚いた。彼は修道士ににおいのために彼女をあきらめることはないし、彼女が父親の望み通りに同意しない限り、立ち去ることもないと伝えるように命じた。ヴィエンナは苦々しく答え、神が彼女にお与えになったすべてにかけて首の血管がはりさけるように壁に頭をぶつけると言った。「あなたは私の死の原因になるのです。」

修道士は彼女にそうしないように言った。「もしあなたのご意志でなければ、お父上はもうおっしゃらないでしょう。今夜よくお考え下さい。明日どんなお答えをいただけるか伺おうとあなたの所に戻って参ります。あなたの侍女と相談して下さい。私も神に祈ります。神があなたにいい考えを与えて下さいますように。」

これをみなすべてパリスの口の代わりに修道士が話した。彼らはヴィエンナと別れ、ドルフィンの所へ行き、彼が気にかけていることをすべて話した。彼はパリスにこのことでは無罪だと思ってくれるように頼んだ。というのも、彼のせいではなかったからだ。彼らがヴィエンナと別れると、彼女がイザベルに言った：「イザベル。

ブルグント公爵様のご息はお断りになりながら、この異教徒との結婚を望んでいらっしゃるお父様の賢明さをお前はどうか考えるの。」神様は私がまだ思っているパリス様以外の方と結婚するのを望んでいらっしゃるわ。」「ほんとうに。」とイザベルが話した。「ヴィエンナ様をこの異教徒と結婚させようとなさるお父上についてどう申し上げたらよいか存じません。あの者は明日戻って来て、それまでにヴィエンナ様に考えていたきたいと申ししておりました。」

[52.]

パリスが牢獄のヴィエンナの所へ話しに来て、彼女にそれが彼だと分かった様子。

翌朝にパリスは以前にも増して高価な身なりをして、高価な剣を腰につけ、修道士と一緒にヴィエンナの所へ行った。修道士は言った：「ヴィエンナ様。私たちは二人ともすばらしいお返事を伺いに戻って参りました。」ヴィエンナがすぐに答えた：「修道士様。私は決して約束を破るつもりはありません。と申しますのも、私は決して結婚もせず、生きているうちは牢獄からも出ないと約束したからです。あなたはいらっしゃりたい所へいらっしゃって構いません。」「誓って。」と修道士は言った。「どう申し上げたらよいか存じません。この異教徒に同意なさらないという理由で、ヴィエンナ様がこの牢獄でこんな苦難を受け入れていらっしゃるのには残念です。この指輪を彼への愛のためにお持ち下さい。」それは礼拝堂で別れる時にヴィエンナがパリスに渡した指輪だった。ヴィエンナは異教徒から解放されようと指輪を受け取った。彼女が指輪を受け取ると、パリスは修道士に外へ行き、待っていてくれるように頼んだ。そこにとどまり、ヴィエンナが指輪に対してどんな態度を取るか見ようとした。ヴィエンナは熱心に指輪を見た。それを見ると、パリスは上手なフランス語で言葉をかけた：「ああ、気高いヴィエンナ様。どうしてそんなに指輪に驚かれるのですか。」ヴィエンナが答えた：「ほんとうに。こんなに美しいものは一度も見たことがないと存じます。」パリスは言った：「喜んでお受け取り下さい。と申しますのも、それをご覧になればな

るほどいっそうお持ちになりたくなくなります。」異教徒の話を知ると、ヴィエンナはちょうどまるで彼が魔法にかかっているかのように完全に驚いて言った：「ああ、主なる神よ。私が見たり、話を聞いたりすることはどうしたら実現するのでしょうか。」異教徒の話を知ったので、彼女はまるで牢獄から飛び出すかのようにふるまった。パリスは言った：「ああ、気高いヴィエンナ様。驚かないで下さい。ご覧下さい。ここにおりますのはヴィエンナ様の誠実な家来パリスです。」ヴィエンナは以前にも増して驚いて言った：「ほんとうに。あなたのはずがありません。」パリスは言った：「ほんとうに申し上げます。私はヴィエンナ様をイザベルと一緒に礼拝堂に残して参りました。ヴィエンナ様はお渡ししたダイヤモンド付きの指輪をくださいました。私以外の者とは決して結婚しないと約束して下さいました。ヴィエンナ様に分からないようにするひげにも身なりにも驚かれてはなりません。」彼女が分かるようにととてもはっきりと言った。彼女は言い尽くせないほどの愛と心の喜びで泣き始めた。立ち上がり、彼の腕の中に飛び込んだ。彼は大喜びで彼女をととてもいとおしく抱き締めた。いとおしく彼女の赤い口に何度もキスをして、心地よい話で彼女を慰めた。彼らは長い間愛し合ったままだった。

[53.]

パリスはヴィエンナにどうしていたか尋ねた。彼女はみなすべて打ち明けた。侍女イザベルはその前の夜に眠っていなかった。床についてぐっすり眠っていたので、このことについては聞いていなかった。しかし、彼女はこの二人の恋人による喜び合いで目を覚ました。さて、ヴィエンナが異教徒の腕の中にいるのを見ると、トルコ人の腕の中にいるとは正気かどうか、彼にととても好意を持ったので、もう魔法をかけられたかどうか、そのためにとても苦しんだ、気高い騎士パリスに約束した操があるかどうかと驚いてヴィエンナに言った。ヴィエンナは言った：「イザベル。もうそんなふうには言わないで。こちらへ来て、私と一緒に喜んでよ。だって、私にもお前にも幸せが来たんですもの。ご覧。ここにいるのは私たちが長い

間望んでいた私のえり抜きのパリスよ。」イザベルは彼の少し近くへ行き、それがパリスだと分かった。彼を抱き締め、その口にキスをした。三人はみな言い尽くせないほどの大喜びだった。パリスがヴィエンナに話した：「ヴィエンナ。お父上に伝えなきゃ。お父上の所へ行こう。でも、君に言わないちは、お父上に話さないでくれ。」彼らが牢獄から出て行くと、修道士はまだパリスを待って立っていた。彼らはドルフィンの前へ行った。パリスがヴィエンナと一緒に来るのを見ると、ドルフィンは喜んだ。しかし、ヴィエンナが牢獄から出たのを不思議に思った。パリスが修道士に言った：「ドルフィン様と私の意志に従ってご令嬢の考えを改めさせまし、彼女を妻としてくださるようドルフィン様に申し上げてくれ。」ドルフィンがヴィエンナに話した：「この方をお前の夫にしてやろう。私を牢獄から救い出し、私のために命を賭けて下さったんだ。」ヴィエンナはパリスに父親に答えてもいいか尋ねた。パリスは言った：「うん。」ヴィエンナは言った：「お父様。私はお父様とあの方のご意志を行う用意ができております。私がお父様に対していたしましたことをお許し下さり、私をお慈悲の中にお受け下さい。」彼女がそう言うと、父親は彼女が自分に対して行ったことを許し、彼女を慈悲に受け入れ、和解のしるしとして彼女にキスをした。ヴィエンナは言った：「お父様。さあ、ご覧下さい。こちらが私のえり抜きのパリス様です。私は長い間この方を望み、そのためにとても苦しんだのです。この方が私の部屋の前で心地よくお歌いになり、上手に演奏なさり、ヴィエンナの町で賞を獲得なさり、水晶の楯とバラの冠をお持ち帰りになったのです。この方がまたパリの馬上試合で賞を獲得なさり、三つの宝石が付いた三本の軍旗をお持ち帰りになり、正体を知られないようにそこをお立ち去りになったのです。」パリスは自分の父親に話しに行った。長い間会いたがっていた息子パリ

スだと分かったと、彼の父親は大喜びで彼の腕をつかみ、母親と仲間エドゥワルトにあいさつさせようと息子を家に連れて行ってもよいかドルフィンに尋ねた。ドルフィンは彼に一日は認めるが、それより長くは認めないと言った。「というのも、明日結婚式を行いたいからだ。」パリスが父親の家へやって来ると、そこが大喜びだったのはなんら不思議なことではなかった。というのも、一人息子が領主の娘、麗しのヴィエンナを妻にすることになったからだ。

[54.]

翌日にドルフィンは娘をパリスと結婚させた。大きな饗宴が言い尽くせないほど大喜びのうちにおよそ十四日間行われた。パリスとヴィエンナは一緒に長い間大喜びのうちに暮らした。しかし、パリスの両親はじきに亡くなった。パリスとヴィエンナは三人の子をもうけた。息子が二人で娘が一人だった。ドルフィンは彼らにふさわしいみごとな結婚をさせた。父親が死ぬと、パリスは仲間エドゥワルトを両親の財産の跡継ぎにしようとした。彼とイザベルを結婚させた。彼らは長い間一緒に愛のうちに仲よく暮らした。ドルフィンと妻が亡くなった。パリスはドルフィンの国の領主のまま変わらず、四十年間ヴィエンナと一緒に暮らした。一年のうちに二人とも至福のうちに亡くなり、何人かの人たちも至福になりたがるほどだ。一年のうちにエドゥワルトとイザベルも亡くなった。さあ、この世でこんな暮らしが与えられ、永遠の国で神と一緒に永遠に喜んでいられるように主なる神に祈りましょう。

アーメン。

この本は、西暦 1488 年、有名な商業都市アントワープで私ヘラルト・レーウが仕上げて印刷しました。

主要参考文献

- Mante, A., ed. *Paris und Vienna: Eine niederdeutsche Fassung vom Jahre 1488.* Lund: Gleerup, 1965.
Wahle, G., tr. *Paris und Vienna.* Stuttgart: ibidem, 2001.
石田基広. 『中世低地ドイツ語による騎士物語「パリスとヴィエンナ」』 東京: 大学書林, 1993.